
日本子ども社会学会 学会ニュース

第15号 (2008/05/20)

日本子ども社会学会事務局

〒658-0001 神戸市東灘区森北町 6-2-23 甲南女子大学人間科学部文化社会学科 細辻研究室気付

FAX :078-413-3007(人間科学部事務局) E-mail :jscs@kodomo-cu.jp

U R L : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/>

目次

学会の倫理綱領について	1	各種委員会からのお知らせ	4
第14回大会を終えて	2	事務局からのお知らせ	5
第14回大会シンポジウムの報告	2	新入会員、住所・所属等変更、退会者	6
第15回大会開催校から	3		

学会の倫理綱領について

会長 住田 正樹

近年、全国の主要研究機関で科学者の不正行為が相次いで起こったため、日本学術会議は強い危機感を持ち、科学者の不正行為を防止するための対策として各大学・研究機関、各学術研究団体に対して早急な対策をとるように要望しています。日本学術会議が2004年に、登録している1481学会を対象に調査をしたところ(※1)、回答のあった838学会(回収率56.5%)のうち113学会が過去5年間(1999~2004年)に「ミスコンダクト」(非倫理的行為)が役員会、編集委員会で話題になったことがあると答えています。その内容は、論文の二重投稿67学会、研究の盗用・論文の剽窃23学会、プライバシーの侵害5学会、データの捏造2学会、データの改ざん2学会、研究資金の流用2学会、その他43件となっています。しかしそれに対する組織や手続きを決めている学会は148学会でしかありません。

こうした状況を踏まえて日本学術会議は、2006年に「科学者の行動規範について」という声明を出し(※2)、各大学・研究機関、各学術研究団体に対して、自らに相応しい倫理綱領、行動規範を策定、公表することを求めています。またミスコンダクトが認められた場合の対応措置についても予め制度を定めておき、事後処理が明確かつ公正に行われるような手続きを制定することを求めています。

こうした要望を受けて、本学会でも日本学術会議の策定した「行動規範」に依拠しつつ、近々「倫理綱領」を策定したいと思っています。もっとも倫理綱領とか行動規範といっても、とくに難しいものではなく、研究者として自覚していなければならない当然のことであって、大げさなものではありません。これまで当然のこととされていた内容を単に文書化しただけのことではないかと思われるかも知れません。しかし現在の研究者を取り巻く環境は業績主義・成果主義、研究費の獲得など年々厳しくなっていますので、ここで改めて研究者としての倫理意識を喚起するという意味もあると受け取っていただければ幸いです。会員諸氏のご協力をお願いいたします。

(※1)「科学におけるミスコンダクトの現状と対策—科学者コミュニティの自律に向けて—」

(日本学術会議学術と社会常置委員会報告 平成17年7月21日)

(※2)「声明 科学者の行動規範について」 (日本学術会議 平成18年10月3日)

第14回大会を終えて

大会委員長 押谷由夫

まずは、会員の皆様のご指導、お力添えを賜り、第14回子ども社会学会全国大会を無事終えることができましたことを、心より感謝申し上げます。準備に万全を期したつもりでしたが、慣れない由、いろいろとご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

大会を振り返ってみますと、いろんなことに気づきます。大会校の義務として、この14回大会が少しでも皆様の心に残り、次の全国大会へとつなげていただくようにすることがあるかと思えます。その意味から少し述べさせていただきます。

まず、大会第1日目は、研究発表1から始まりました。同時に元水泳のオリンピック選手でもあられた長崎宏子さんの講演会がありました。鹿児島大学の山本先生のご尽力によるものです。自分の小学校、中学校時代からの心の内面での葛藤や支え、それらの体験を経てのアメリカ留学そして現在の指導員としての生き方等、子どもとスポーツを考える上で大変示唆に富むお話でした。午後はワークショップとシンポジウムが行われました。それらについては報告をご覧ください。

2日目は、研究発表ⅡとⅢ、及びラウンドテーブルでした。研究発表はⅠ、Ⅱ、Ⅲ合わせて47件ありました。部会は、発表内容を考慮して、結果的に、家庭教育、子育て支援、保育と保育者、地域と子育て問題、学校・家庭・地域連携、学校教育、中等教育、現代社会の中の子ども、社会の変化と子ども、青少年と意識、海外教育と異文化、ジェンダー、理論・歴史研究ということになりました。傾向として保育関係や地域での子育てにかんする研究が多かったように思います。ラウンドテーブルについては、報告をご覧ください。

これらを振り返ってみますと、今日の子ども社会に関する会員の興味関心の動向を見ることが出来ます。傾向として、どうしても学校外の子ども社会に関心が向くようです。

私どもの企画としては、シンポジウムと教員養成に関するラウンドテーブル、そして講演でした。シンポジウムの提案は、子ども社会を学校・家庭・地域で捉えなおしそれらの響き合いを可能にする方策について探ろうとするものでした。また、ラウンドテーブルは子どもの社会性・集団性を育む教員養成のあり方について考えようとするものでした。子ども社会研究がもっと学校改革とかかわらせて取り組まれる必要があるのではないかという問題提起をしたいという意図がありました。講演は山本先生のお力添えによって実現したのですが、このような講演を一般公開で行うことも学会の発展にとって必要かと感じました。学会の発展に少しでもお役に立てたならば幸いです。ありがとうございました。

第14回大会シンポジウムの報告

昭和女子大学 押谷由夫

今回のシンポジウムの企画は、子ども社会学会のフィールドである子ども社会を正面から取り上げ、その変容と実態を明らかに、これからの子ども社会にどうかかわっていけばいいのかを議論することになりました。その背景として、子ども社会そのものの変容が話題にされますが、子どもが変わったというレベルで議論されることが多いこと。今日のもっとも大きな教育課題として子どもたちの社会性・道徳性の育成が挙げられること。さらに、子どもの教育において学校・家庭・地域連携を具体化するにはそれぞれの場における子ども社会の実態を押さえての連携が不可欠であることです。

昭和女子大学の有村久春先生からは、学校における子ども社会の変容と対応について、学校・学級における子ども社会の実態として「集団活動を好まない」「リーダーになりたくない」「自己肯定感の低さ」「夢や希望をもっているが現実をわかっていない」状況を指摘し、関係性の基礎能力育成への発達段階に応じた援助、子ども社会成立の五つの基本要件、価値教育のカリキュラム化を提案されました。

鳴門教育大学の伴恒信先生からは、家庭における「子ども社会」の変容と対応について、本年5月

に参加されたアメリカ政府主催の「市民教育世界会議」での議論を取り上げながら、特にアメリカにおける家庭の変化に伴う「子ども社会」の現実と対応について紹介されました。そして、アメリカで展開されているサービスラーニングを参考に我が国で取り組まれた実践事例をもとに今日の「子ども社会」への対応について提案されました。

本学会会長である住田正樹先生からは、「子ども社会」の捉え方についての理論的整理をされつつ、地域の「子ども社会」を「同一地域の居住を直接的な相互関係の契機とする『子ども社会』」と定義し、「子どもたちだけをメンバーとする仲間集団」と「大人をもメンバーとする地域子ども組織」に分け、前者の子どもの仲間集団の変容について長年続けられている調査研究をもとに分析結果を示されました。そして、現在は仲間集団の形成契機が喪失し仲間集団の消滅の危機にあることを指摘され、その対応について提案されました。

各提案の後の討議では、活発な意見の交換がありました。特に、本来の「子ども社会」の復活において、大人の手を差し伸べないのがいいのか、むしろ差し伸べたほうがいいのか。その場合、学校、家庭、地域それぞれにおいて違いがあるのではないか。その中で連携を図るにはどのような対応が必要なのか。個人への対応と「子ども社会」及び「大人社会」への対応との関連をどのようにつなげていけばいいのかといったことについて議論されました。これからの「子ども社会」研究の発展につながる内容であったように思います。

第 15 回大会開催校から

日本子ども社会学会第 15 回大会実行委員会

学会員のみならず、第 15 回大会開催校から学会準備状況をお伝えします。まず、今年度の一般報告数は合計 39 本で、研究発表 I～III までに、それぞれ 4 部会ずつ編成いたしました。一般報告の教室では、すべてパワーポイントが使用できます。USB メモリなどをご持参ください。それから、大会第一日目のワークショップは、「子どもの協同活動のビデオ観察と解釈」と「子ども社会とメディア研究」を並行して行います。次に、大会第二日目では、公開シンポジウムⅠとして「いじめ問題をめぐるシンポジウム」を学校現場からの報告も交えて開催します。並行して公開シンポジウムⅡとして「少子化問題について現代日本の現状を問う」というテーマで、沖縄県と香川県の取り組みの報告を踏まえながら、公開討論を行います。最後のラウンドテーブルとして、「子ども学再考」「ビデオ援用に基づく実践と研究の対話：保育者の語りに見る専門的見識」、そして学会共同調査の経過報告「学校裏サイトの研究」の 3 部会を並行して行います。盛りだくさんの企画ばかりですので、ぜひふるってご参加ください。

すでに前回のニュースでも触れましたが、再度、交通と宿泊についてご案内いたします。まず、学会会場である松山大学に一番近く、徒歩圏内にあるホテルは「ホテル泰平」です。<http://www.hoteltaihei.co.jp/>にアクセスしてください。別館もあるようです。また、有名な道後温泉からも近くです。遠方からの参加の場合、航空会社とタイアップした航空チケットと温泉旅館やビジネスホテルの宿泊が一体になったパッケージ旅行商品があります。大学生協や旅行会社で購入できますので、各自で問い合わせてください。なお、地元の旅行業者としては、フジトラベル・サービスがあります。ホームページは、<http://www.fj-t.com> です。

帰りの時間が気になる会員の方には、学会終了後の飛行機の便として、東京方面の最終便が 19:45、関西方面が 19:05、名古屋方面が 20:15、福岡方面が 18:50 となっております。大学から松山空港までタクシーで 30 分程度ですので、17:30 の学会終了後に空港に向かっても十分最終便に間に合うと思われます。また広島港までの高速フェリー（スーパージェット）の最終便は、21:00 となっております。

初夏の松山は観光シーズンの最中で、少し足を伸ばせば、内子町や宇和島もあります。懇親会では松山名物も取り寄せて楽しんでいただく準備もしております。それでは松山でお会いしましょう。

各種委員会からのお知らせ

紀要編集委員会

望月 重信

日本子ども社会学会は子ども研究における「学際性」を重視しています。それだけに「子ども社会研究」に投稿して下さる会員の皆さんの論文は実に学際性に満ちたものとなっています。

「子ども社会研究」第14号は会員の皆さまのご助力によりまして、第15回大会（松山大学）初日6月28日（土）に刊行の予定です。

第14号への投稿数は23本でした。そのなかから10本の採択（研究論文7本、実践論文1本、研究ノート2本です）としました。いずれも好論文、好ノートと確信しています。

第14号の新しい企画として、書評の対象本、著者の「書評に答えて（仮）」という構成があります。著者と評者との「対話」が紀要で実現しました。まだいくつかクリアしなければならない問題がありますが、先導的試行ということで始めました。ご理解いただきたく存じます。

ここ数年、会員のみなさまの投稿論文に幅が出てきています。編集作業（査読）は難仕事ですが、学会の水準を維持できたものと自負しています。投稿して下さった会員の方々には十分な対応ができずにご迷惑をおかけしましたが、ご協力くださり、感謝致します。

第15号への多くのご投稿（2008年9月30日締め）を心よりお待ちしております。

共同研究事業プロジェクト委員会

深谷和子・高旗正人

19年度（第3回）の学会共同調査には8/31の締切時点で応募がありませんでした。規模の大きい調査を求められているにせよ、補助金額が少ない（2年間で50万円）ためかと思われます。

12月2日に京都で開かれました理事会で、今年度は第1回同様に、理事会企画で調査を走らせることになりました。テーマは「子どものケータイとネット利用に関する全国調査（学校裏サイト調査）」（仮称）として、2班構成でA班はアンケート調査、B班は裏サイト調査を実施することになりました。A班は6月の大会発表に間に合わせるべく、第1回子どもの放課後調査のメンバーが当たることにして、4月15日現在、学校調査（全国の中学校20分の1抽出）（179校回収）、生徒調査（中2生徒、2,222人分回収）を実施し、データも既にアップしております。

B班は参加希望者を学会HPとニューズレターで公募し、12名の会員からご応募いただきましたが、今回は予算の関係で、関西圏の会員6名でチームを編成させていただきました。悪しからずご了承くださいませよう、お願い申し上げます。

A班 深谷和子・高旗正人・深谷昌志・三枝恵子・須田康之・西本裕輝（6名）

B班 山縣文治・井上信次・小針誠・田川隆博・中田周作・松下一世（6名）

将来構想委員会

田中 統治

ワークショップ等の名称変更、学会事務局業務のアウトソーシングの可能性、テーマセッションへの研究交流委員会の関与の仕方、企画研究の内容などについて検討してきた。結論は出されていないが、今後、さらに引き続き検討していくことにする。

事務局からのお知らせ

(1) 学会費納入

本年度（平成 20 年度）の学会費を、郵便振替にてお納めください。学会費を滞納されますと会員資格が失われます。口座番号等は次のとおりです。なお、通信欄には必ず何年度の学会費かをご記入ください。

```

< ////////////////////////////////////// >
< 口座番号      0 1 7 6 0 - 1 - 8 5 0 4 8 >
< 加入者名     日本子ども社会学会 >
< ////////////////////////////////////// >

```

(2) 会費

平成 13 年度より会費が値上げされています。学会費振込みの際はご注意ください。

```

////////////////////////////////////
、 正会員 7,000 円、 学生会員 4,000 円、 団体会員 10,000 円
、 //////////////////////////////////////

```

(3) 学会入会手続き

本学会へ入会を希望される方は、学会事務局（住所は 1 頁参照）まで、切手を添付した返信用封筒を同封の上、ご連絡ください。事務局より入会案内書をお送りいたします。入会される場合、入会申込書に必要事項を記入の上（現学会員の推薦が必要）、会費を郵便振替にて納入してください。

(4) 住所・所属等の変更

住所、所属、電話番号等に変更があった場合、必ず学会事務局へお知らせください。これらの変更は『学会ニュース』にてお知らせいたします。また、退会される方も、必ず学会事務局へお知らせください。いずれの場合も、電話ではなく**葉書**や**FAX**、**E-mail**等の書面にてお願いします。

(5) 『子ども社会研究』創刊号の販売について

皆様のご要望により、『子ども社会研究』創刊号を再版いたしました。購入希望の方は、下記の要領で郵便振替にて紀要代金（1 冊 2,000 円）と送料をお振込みください。『子ども社会研究』は、現在、13 号まで発刊されています。その他の号の販売も受け付けております。送料等、詳しくは、学会 HP をご覧ください。

口座番号	0 1 7 6 0 - 1 - 8 5 0 4 8
加入者名	日本子ども社会学会
通信欄	<u>「子ども社会研究」第〇号代金および送料として</u>

(6) 献本

無藤 隆 監修、鈴木 佐喜子・師岡 章 編集

『よくわかる NEW 保育・教育実習テキストー保育所・施設・幼稚園・小学校実習を充実させるためにー』 2008 年 2 月 診断と治療社

大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編

『男の育児 女の育児ー家族社会学からのアプローチ』 2008 年 4 月 昭和堂
